

84 誌上発表 『緒方洪庵歌集』にみる「老」のうた

小曾戸明子

おそど末病研究室

岡山市の備中足守まちなみ館で、観光みやげの中に、『緒方洪庵歌集』を見つけ入取した。昭和29年1月の日付での緒方富雄の序文があり、76頁、たて21cmよこ15cmの冊子である。岡山市近水観光振興会と緒方洪庵顕彰会の名で平成21年11月発行と記され手づくりの味わいがある。表紙の裏に緒方洪庵年譜と題した紹介文900字に肖像画(3.5cm×3.5cm)がついている。背に刀があり洪庵53歳像のようだ。

緒方富雄によれば、歌稿は佐々木信綱に選をお願いし整理していただき、『歌集』として発表できるようになったのは、ひとえに先生のおかげであると言う。洪庵の和歌そのものはもとより論ずるにたらないであろうが、洪庵という人物がのこしたものであるということだけでうけいれていただければ幸である。と結ばれている。

春歌(25頁206首)夏歌(13頁101首)秋歌(6頁42首)冬歌(4頁31首)恋歌(3頁16首)雑歌(10頁74首)歌文(12頁)の順に、1頁8~10首で題や言葉書を含め密度ある冊子となっている。

冒頭は、癸卯元旦 億川大輔に の題で、

何事も なけれど今朝は 老が身も 初日うれしく あふがるかな
続く一首は、四十ぢの元旦に

踏みそむる 老の坂みち 末遠く かすむばかりの春は来にけり
次頁には、若水と題して

身によする 老の波をも 忘れ井に おざや汲みてむ 今日の若水
春歌にはさらに2首

萌え出づる 野辺の若葉に 老が身は としもだぐへて つまむとぞ思ふ
唐桃は さもあらばあれ さくらさく み国の春に 老もわすれつ

夏歌、冬歌、恋歌には「老」の文字はない。

秋歌には 虫と題して一首

われこそは 老のうきねを なきあかせ あなかも虫の 何なげくらん
雑歌には 五十になった歌に続き3首

大方の 人におとらで 事もなく 五十路の春を 迎へつるかな
ことはみな 若きにゆづる 老が身を 年の急ぎは のがれざりけり
老の波 寄る真鶴の いくぢの まご子か見つゝ おもひかくらむ
うらわかき よは夢なりき あすよりの 老をばながく うつゝにぞ見む

以上全470首について老の文字に注目して紹介してきたが、いずれも40歳、50歳の節目にみられる。古典和歌の世界では40歳以降は老年とされ、洪庵もそうした「晩年意識」の心情をごく自然に身に備えていたであろう。

そうした心情とは逆に洪庵の身辺は多忙を増す。日本の大学の校祖ともいえる大阪の適塾は、洪庵が医業のかたわら開いた蘭学塾にはじまる。教育者として近代日本の担い手を育て、師は往復書簡という“生涯教育”でこれを支えたと言われる。歌会を通じての教育もあったであろう。

ともすれば むかしわするゝ 世の中に 雁はこし路を たがへずも行く
うれしくも 見る月影は 故郷の ふるきむかしに かはらざりけり
年毎に おひそふ野辺の 小松原 千代に繁れと うえもかさねむ

変わらぬものへの愛着と、種痘の和歌一首に托す若きへの期待、洪庵の偉業を支へるうたの力を思う。